

「ユビキタス時代の歩み方講座」第4回 2006/5月号

「情報の進化」

速水 智子

<http://www.hayamizu.jp>

みなさま、こんにちは。

これまで三回にわたって、“ユビキタス時代”というものを大きな視点からながめてきました。今回はこの世界に少し歩み寄って、個人とユビキタス時代とのかかわりについて考えていきましょう。

この変化に満ちた世界と私たちひとり一人は、どのような関係にあるのでしょうか。そのために、本日は“情報”をテーマにとりあげてみます。

ユビキタス時代の恩恵の一つは、情報のやりとりにかかる費用がとて安くなったことです。それによって、私たちは、時間と距離の制約を超え、情報を送ったり、受け取ったりすることを頻繁に行うことができるようになりました。

今では、私たちは、どこにいてもあふれる“情報”の洪水の中に暮らしているような状況です。

さて、このように私たちと密接にかかわる“情報”は、実は様々な側面を持っています。可能性と不思議さに満ちたその様相について見ていきましょう。

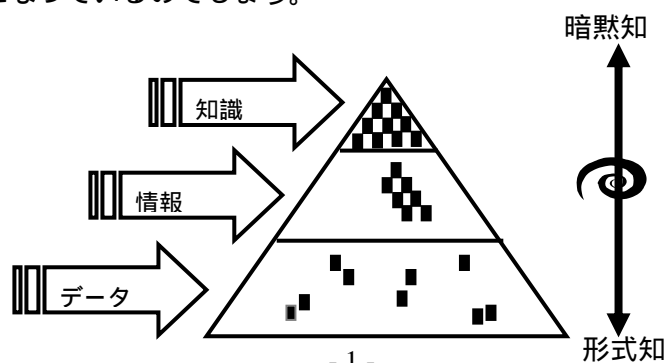
データから知識へと進化する

情報ということばはあまりにも色々な場面で使うものなので、ばく然としています。

ここではすでに一般化されている考え方に沿って、少し整理してみましよう。

図を見ていただくとわかるように、人間や機械がやりとりする信号や合図すべてを「データ」と呼びます。データのうち受け手が理解できるものが「情報」となります。さらに受け手は、この情報を利用して別の情報を得たり技能を身につけたりすることもできます。このように二次的に得た情報や技能が「知識」と呼ばれます。知識は情報に比べて、人が洞察を加えたものです。

データ 情報 知識とその内容は、より進化していきます。では実際に生活の中で情報の進化はどのようになっているのでしょうか。



店長のひらめき

例えば、ある店では、毎年、九月の第二日曜日になると清涼飲料水の売上げが極端に増えます。店長はなんだろうと思っていました。

ある日、店長ははっと、気づきました。それは、近くの小学校で運動会があるということのを思い出したからです。この時点で“データ”は“情報”へと進みます。

そのことにより、店長は清涼飲料の仕入れを増やし、お弁当フェアを企画しました。その結果、売上げは、倍増してお客様も満足しました。

私たちにとっては、「九月」、「第二日曜日」、「売上げ」、「増加」といった何の意味を持たない“データ”が店長にとっては、多いに価値をもたらすものへと発展したのです。

受け手の感度に左右される

このように、情報の興味深いところは、受け手の感度によりいくらでも価値が変わることです。知識社会の到来と言われる今日、この情報に対する感受性が高いことがますます重要になってきました。そのためには、図の三角形のデータにあたる部分を豊かにしておく必要があります。つまり、自分自身の知的土壌を豊穰にしておく、データを組みあわせたり、結合したりといったことをより、起しやすくなります。その結果おもしろいアイデアがわいたり、イノベーションにつながるような創造的な機会を増やせるわけです。

日ごろから、何事にも広く興味を持つことは、その可能性をいっそう高めることとなります。

暗黙知と形式知

“知識”は、古代より多くの研究者のテーマでもありました。

「知識は、驚きをその源泉とする」と哲学的に語られる場合もあります。また現代においては、知識工学的なアプローチもあります。しかし、真実の解明はまだ先のようなのです。

さて、そのような中、マイケル・ポランニーという人は知識の中には、「暗黙知」と「形式知」といったものがあると考えました。

「形式知」というものは、客観的にとらえることができ、言葉で伝えやすいものです。例えば、文章化したり、マニュアルにできるようなそんな“知”です。では一方の暗く黙っている知とはどんな知なのでしょうか。

暗黙知とはとても主観的で、言葉にすることはむずかしく、経験やイメージで表されるものです。個人に埋め込まれていて、粘着性が強く通常の方法では人に伝達がむずかしいと言われています。例えば、歌舞伎役者の芸風や職人の匠の技のようなものです。

暗黙知に近づく

粘着性が強いということはどういうことか、実際のお話を元に説明をしてみます。ある

メーカーがパン焼き機の開発を試みました。有名なパン職人のところへ担当者が何回も足を運び、作り方の工程を聞きだしました。社に戻って、聞いた工程通りに、パン焼き機を開発しました。ところができあがったパンは、職人のものとは似て非なるものでした。

担当者は悩みました。そこで、職人と一緒にパン作りをすることにしました。担当者は、一緒に行動する中で、職人がわずかに生地にはねりを入れることを発見したのです。それは、行動を共にして、初めて気づくような微妙なものでした。

つまり、粘着性が強いということはその人固有のもので、離れにくいということです。そのために、一緒に行動したり、場を共有して、初めて理解できるような“知”なのです。師弟の間で取り交わされる教えのようですね。

このように、暗黙知には、記憶力や優秀さとは異なる、個人的な営みに係るような性質があると思われます。その人の歩みの中で身につけてきた人生の軌跡のような深遠なものです。

社会化する“知”

さて、日本も二〇〇七年に、団塊の世代が企業人から生活者として、続々と地域に戻ってきます。高齢社会への歩みは今後、一段と加速されるでしょう。

経済的な観点からみれば、これまでのような、右肩上がりの成長路線を期待することはむずかしいことかもしれません。しかし、視点を変えれば、新しい可能性が待ち受けています。

これまでの資本主義社会の価値観とは異なり、知識社会では個人が持っている“知”がとても重要になってきます。社会は、暗黙知や知恵を持つ人をより求めていくようになり、そのような人々の活躍の場は多いに広がると思われます。

今後、知恵や多くの経験を持つ高齢者の存在感は、増していくでしょう。

すでにアクティブシニアやお年寄りによるNPO活動やコミュニティビジネスへの取り組みは盛んになっており、地域の問題解決に大きな活力をもたらしています。

このように、ユビキタス時代は、小さな個人の知恵が建設的な力を生み出す可能性に満ちた社会とも言えます。

情報から知識へ、そして“叡智”へと高めていくために必要なことは、私たち一人ひとりの暗黙の“知恵”を社会へむけて、開花させていくことかもしれません。

そして、知恵を社会化したその先に、個人が生きがいを見つけたり、自己実現を果たせる世界が待っているのではないのでしょうか。

さて、次回も引き続き、知識から知恵へと向う知識創造のダイナミックなメカニズムについてお話を進めていきたいと思えます。

2006/5